

福井全中参戦記

札幌市立清田中学校

監督 高橋 和也

1. チーム作りの初期において

全道四連覇の記録が中体連札幌予選ブロック決勝での敗退を以て途絶えたところから、新しいチーム作りは始まった。

主力がほとんど下級生だったので、スムーズな代替わりではあった。また、例年であれば全中への準備で多忙を極める夏休みに、基礎・基本を徹底できるという最も望ましい環境で新チームは始動していった。

しかし、夏休みも終盤に差し掛かった頃、こちらからではなく先方から申し込まれた練習試合を引き受けると連戦連敗。それもそのはず。チーム練習をほとんど行っていない状態で、ある程度仕上がったチームと試合をすれば上手くいかないのは必然である。

だから、選手には「この時期だから勝敗は全く気にする必要がない。」と言って聞かせるのだが、どの顔にも不安の色が浮かび上がる。

中学生はまだまだ自分に自信がない。しかも新チームの発足は前の代の敗北がスタートのきっかけとなるのだから、「負けた記憶」というのが生々しく残っているのである。

これを払拭する一番の手だてはやはり勝つことである。だが、目先の勝利にこだわっているとチームは大成しない。今は亡き三上先生(前・藤枝明誠高校監督)がご健在だった頃、「新チームの仕上がりが早いと最後は手詰まりになる。末広がりチームになるように、まずは基礎を固めなさい。」と言われていたことを思い返し、夏は最後まで基礎・基本に没頭した。

2. 本格的なチーム作りにおいて

夏場に徹底して行った基礎固めのおかげで、強固なディフェンスで試合を展開することがで

きるようになった。新人戦札幌予選、招待試合やカップ戦を通して、1試合の失点が40点を超えられた試合は僅か1試合。チームの最長身者は170cmに満たなかったが、それを補う運動量、相手との駆け引き、心身のタフネスで大きなアドバンテージを得ていた。

ただ、JBAのマンツーマン推進の動きが不透明だったことが、その後のチーム作りの不安要素とはなっていた。

当初はいわゆるベタゾーンを禁止することが目的なわけだから、オールコートのゾーンプレスは何ら問題ないという論調が中央から上がってきていた。ところが、10月段階でJBAから最初に形となって伝達されてきたものは、ヘルプディフェンスやスクリーンでのショウハードも認めないベタゾーンならぬベタマンツーマンの提案であった…。

ウチとしては伝家の宝刀であるゾーンプレスをお蔵入りさせるという死活問題。さらには、小さいチームが勝つために必要なマンツーマンもできなくなってしまう、言わば手かせ足かせされるようなルール改訂に思えた。

もちろん、マンツーマンによる攻防はバスケットボールの基本中の基本であり、これを全く無視してゾーンに走る行動はあり得ない。

また、従来であればゾーンの攻防に練習時間を割かなければならなかったが、それがなくなったことにより、指導量がかなり少なくなり、指導者にとっての悩みの種が1つ減ったことにもなる。

だが、ゾーンやプレスを知らないままに育った選手が今後どうなっていくのかという漠然とした不安。また、中学指導者が今や専門書のゾーンのページを割愛してしまう現状は、本当にバスケットボール界においてよいこと(発展)なのかと考えてしまう。

現在でも「本来のマンツーマンはこうだ！」とばかりに伝達は行われ、ベタマンツーマンから緩

やかな変更がなされてきている。だからこそ、現場は現場で中央の論調に振り回されることなく、本来のマンツーマンのあるべき姿を突き詰めていかねばならない。参考までにいうと、ウチのディフェンスで全中では黄色旗も赤旗も上がっていないことをお知りおきいただきたい。

3. 全中までの道のり

順調な秋を終え、冬場の南北海道大会、南北決戦大会でも優勝することができ、北海道選抜や札幌選抜に選手を送り出した。選手は学年が1つ上がり、いよいよ目標である日本一に向けて中体連の試合が7月から始まる。

今年度は全道大会が札幌開催であったため、90ある出場校の中から4チームが出場権を得ることとなった。例年の出場枠2校に比べると、たいへん楽な札幌予選となった。

そして、いよいよ全道大会。舞台は北海きたえーる。北海道とはいっても真夏は暑い。そんな中、空調施設が完備されている体育館で試合ができることは選手にとって最高のコンディションが約束され、幸せの限りであった。

1回戦は不戦勝で、2回戦からのスタート。恵み野、苫小牧緑陵、北星女子といった好敵手とよい試合をすることができた。大会独特の雰囲気や飲まれたり、予想外のアクシデントで人が出ることもなく、決勝までコマを進めることができたのは幸運であった。

決勝戦の相手は札幌北。お互いに手の内を知り尽くした試合となり、前半は押され気味。後半もかなり相手にペースを握られたが、エース小野寺の3ポイントで息を吹き返し、最後の最後まで粘った末に逆転勝ちを収めることができた。試合終盤、北海きたえーるで地響きのようになら上がった歓声は体験した者にしかわからない。選手達は幸せだとつくづく思う。

4. 全中での戦い

全道大会を優勝し、北海道第1代表で全中に出場したからと言って、良い組合せが保証され

はしない。今回は近畿ブロック1位の大阪薫英女学院と関東ブロック3位の八王子一と同じリーグに入った。強豪ひしめく激戦ブロックを勝ち抜いた両校との対戦は「相手に不足なし」どころか、おつりが十分にもらえるほどである。

幸いにして両校の情報をすぐ手に入れることはでき、そのプロセスで先方もこちらのことを警戒していることがわかり、嬉しく思えた。

かつての北海道女子=安全牌のような扱いから脱却できたのである。もちろん、こんなことで嬉しく思うのではなく、それが当たり前にならなくては本当の意味で「強い北海道」にはなれない。今後もジュニアの仲間達と研鑽し、切磋琢磨していきたい。

なお、試合結果はご存じの通り、八王子一にブザービートの3ポイントで逆転負け。試合を観ていた多くの人に「いい試合だった。」と言ってもらえたが、最後の3ポイントはラインを踏んでいたとの証言もあった。審判の判定に「チャレンジ」するシステムはバスケットボールにはない。悔やんでも悔やみきれない試合だが、全中では優勝経験のないチームはボクシングの世界タイトルマッチと同様、判定勝ちではなくKO勝ちするしかないのである。要は変にもつれた試合をするのではなく、スッキリした試合運びをするべきで、この試合も終盤の戦い方に問題があったために逆転を許してしまったと考えるべきである。

それでもまだ大阪薫英に勝利すれば、三すくみになる可能性もあり、逆転負けのショックを無理やり振り切って最終試合にかけた。しかし、前半はリードを奪うも後半に失速して逆転負け。残念な予選リーグ敗退となった。小さくてもやることをやれば頑張れることを証明した今年のチームには、もう少し試合をやらせてあげたかったが…。

日本一の道はまだまだ遠いが、今年の選手達の意志も受け継いで今後も頑張っていきたい。